新潟県立万代島美術館ニュース

B.island

Vol.15
2016

2016年度の企画展

今年度も多彩な展覧会を企画しています。是非ご来館ください。

ビアズリーと日本

2016年4月29日(金・祝) — 6月26日(日)

19世紀末のイギリスで脚光を浴びた夭折の鬼才オーブリー・ビアズリー[1872-1898]。彼は日本美術、特に浮世絵からも学び、6年に満たない創作期間に数々の傑作を残しました。中でもワイルドの戯曲『サロメ』の挿画は有名でしょう。彼の作品の影響力は遠く日本にも伝わり、大正時代の美術にはその名残を感じさせる作品が多くあります。本展では、ビアズリーを軸に、英国と日本を往還した美の交流を約270点の作品により概観します。

オーブリー・ビアズリー《孔雀の裳裾》
(『ビアズリーによるオスカー・ワイルド著『サロメ』の挿画のためのドローイング集』より)
1906年 個人蔵、東京

スタジオジブリ・レイアウト展

2016年7月16日(土) — 10月10日(月・祝)

スタジオジブリの「レイアウト」は、一枚の紙に、背景とキャラクターの位置関係、動きの指示、カメラワークや撮影処理など、そのカットで表現されるすべてが描かれた、映画の設計図にあたるものです。本展では、スタジオジブリ・三鷹の森ジブリ美術館全面協力のもと、「風の谷のナウシカ」から「思い出のマーニー」まで、宮崎監督直筆のレイアウトを中心に高畑・宮崎監督がジブリ以前に手掛けた作品も含め、およそ1,300点のレイアウトを公開します。ジブリ作品の魅力を支える根幹ともいえる、とっておきの"秘密"にふれる展覧会です。

「もののけ姫」©1997 Studio Ghibli・ND

鴻池朋子展

2016年12月17日(土) — 2017年2月12日(日)

絵画、彫刻、アニメーション、絵本などを駆使したインスタレーションで現代の神話を描き、国内外で高い評価を得る鴻池朋子[1960— 秋田県出身]。東日本大震災以降、自然の驚異にさらされた人間の在り方を見つめてきた作家は、人間がものをつくり生きていく行為を、自然に背く「根源的暴力」ととらえながら、なぜ人は「つくる」のか、という問いと真摯に向き合ってきました。本展では、過去の創作から離れ、模索の中から再び動き出した鴻池の新たな現在地を新作にてご覧いただきます。

鴻池朋子《皮緞帳》(部分)2015年
©Tomoko Konoike
撮影：中道淳(株式会社ナカサアンドパートナーズ)

マリメッコ展 — デザイン、ファブリック、ライフスタイル

2017年3月4日(土) — 6月11日(日)(予定)

フィンランドを代表するデザインハウス、マリメッコの国内初となる大規模な展覧会。ファブリック約50点、ヴィンテージドレス約60点、デザイナーのスケッチなど、計200点以上の展示作品に加え、著名デザイナーへのインタビュー、ヘルシンキのマリメッコ本社にあるプリント工場の様子など、展覧会のために撮り下ろされた映像も。多彩な視点からマリメッコの60年にわたる歴史をたどり、個性あふれるデザイナーの仕事ぶりと活躍を紹介します。

ファブリック《ウニッコ》(ケシの花)、
図案デザイン：マイヤ・イソラ、1964年
Unikko pattern designed for Marimekko
by Maija Isola in 1964

2016年度の所蔵品展

新潟県立近代美術館と万代島美術館で所蔵している6,000点を超える作品の中から、テーマを設け、新たな切り口で作品を紹介します。

美術家の青春 — ここから、絵が生まれる

2016年10月27日(木) — 12月4日(日)

新潟県立近代美術館・万代島美術館の所蔵品から、各分野の作家たちが青春時代(主として20歳代)に制作した作品を集めて展示します。表現方法の模索中であったり、すでに高い表現技術を見せたりと、美術家たちの状況はさまざまです。しかし、彼らの作品に真摯なまなざしや清新な感性が感じ取れる点は共通しています。「夭折」の作家たちの作品や、後年大成した画家の「若書き」など、あらゆる世代の鑑賞者にとって触発されることの多い内容です。

難波田史男《無題》1968年(27歳)

Stamp Card

万代島美術館の所蔵品展と近代美術館のコレクション展に来場された方にスタンプカードを発行し、来場1回につきスタンプを1つ押印します。スタンプを4つ集めた方には粗品を進呈いたします。どうぞご参加ください。

ビアズリーと日本

2016年4月29日(金・祝) — 6月26日(日)

水島爾保布(におう)とビアズリー

ビアズリー《クライマックス》
[『ビアズリーによるオスカー・ワイルド著『サロメ』の挿画のためのドローイング集』(1906年)より] 個人蔵

疎開したまま長岡で暮らし歿した画家水島爾保布[1884-1958]。その名を「におう」と読め、雅号でなく本名と知る人は今や少ないだろう。東京美術学校で日本画を専攻、前衛的な絵画団体「行樹社」を設立、新聞・雑誌に評が載り注目されたが、結局作品は売れなかった。震災もあり当時の作品は残存せず、紙媒体に掲載された図版も僅かで、日本画家としての業績把握は難しい。

日本画こそ探索困難だが、爾保布は新聞・雑誌・書籍を舞台に挿画・漫画と文章を主として仕事をしている。挿画なら何とか追跡可能で、『読売新聞』『大阪朝日新聞』『文章世界』等々には、爾保布の日本画についての評判を彷彿とさせるような興味深いイメージが時々現れる。その頂点が『人魚の嘆き　魔術師』挿画だろう。谷崎潤一郎原作に添えた見事な作は、現在中公文庫版で容易に見られるが、1919(大正8)年8月春陽堂刊行の原本となると、現在公立図書館でも目にし難い稀覯本である。この挿画本について、新潟出身の医師で美術関連の著作も多い式場隆三郎が、『ビアズレイの生涯と芸術』(建設社、1948年)で指摘している。「日本におけるビアズレイの画風の影響のあとを辿ったら、その深さと広さにおどろかされると思う。(中略)恩地孝四郎、名越國三郎、水島爾保布、小村雪岱(せったい)、山名文夫(あやお)、山六郎、岩田専太郎などの諸氏の挿絵や装幀にもビアズレイの流れがみえる。ことに水島氏の谷崎潤一郎原作「人魚の嘆き、魔術師」の挿画本は、日本における最も濃厚なビアズレイの影響を受けた作品集として記録さるべきものである。」と。

「最も濃厚な」とは強烈だが、これは出版側の意図でもあった。当時の雑誌に掲載の春陽堂広告中に見られる推奨文は流麗で、「……古往今来此書と比肩すべき者、かのビイアズレエが挿画を加へたるワイルドの神品サロメを措いて、未嘗(いまだかつて)有らざるなり。……」とある。それもそのはず、この文章、実は名を伏せた芥川龍之介の筆になるものなのだ。谷崎=水島をワイルド=ビアズリーに重ねているのだが、出版直後の『東京朝日新聞』掲載広告には「日本のビアズレの称ある画伯の描画は……」とあり、爾保布が「日本のビアズレ」と尊称されていたことが初めて知れる。だが、本人自身はそれを望んでいたのかどうか。

20歳代の爾保布には、ビアズリーの名は冠では有り得なかった。1912(大正元)年の行樹社第1回展出品の「黒白画」《人魚》について、ビアズリー模倣者として批評されたのだ。だが、本人曰く全く知らぬという。この非難の記事は未だ探せないでいるが、1913(大正2)年11月の行樹社第2回展では、世の注目も増した分、爾保布のビアズリー模倣を指摘する展評を3件見付けることができた。

爾保布が言うに、彼のビアズリー初体験は大阪にあった。当時道頓堀にあった通称「旗の酒場」こと「キャバレー・ヅ・パノン」である。文士や芸術家たちの溜り場だった粋な店の壁面には〈サロメ〉が飾られ、そこで友人の画家小林源太郎から名前を教示されたのだった。「パノン」の開店時期は不明だが、二人は、1913(大正2)年4月行樹社大阪展開催のため大阪に滞在していた。また、同年9月20日付『読売新聞』の爾保布のカット画中に「道頓堀PANNONニテ」とある。さらに言えば同年7月1日刊行の文芸誌『モザイク』第2巻第7号掲載の爾保布の実録風の小説「春から夏まで」の中で「パノン」に触れ、「壁にかかったビアズレの絵」、「ビアズレの生首から、ポトリポトリとインキの血汐が滴るほど」といった表現があるから、これが創作であったとしても、この頃にはビアズリー、こと〈サロメ〉連作を知っていたと言ってよい。1910(明治43)年『白樺』6月号誌上で初めて一般に紹介されたビアズリーは、3年後には洒落た酒場の装飾画として酔眼を惑わしている。

上記のビアズリーとの因縁は、自身が1922(大正11)年に書いたビアズリーについてのエッセイ「若き因果物師」(『純正美術』第2巻第6号)で初めて明かされ、この内容は以後『中央公論』などの雑誌に寄稿されて繰り返されている。爾保布の周囲には『モザイク』に関連して文学関係者も多く集っていたのだから、「パノン」以降、ビアズリー研究をせずにいたのかどうか。そして、『人魚の嘆き魔術師』挿画までの谷崎との関係はどうだったのか——爾保布とビアズリーを巡って知りたいことは尽きない。

桐原 浩(当館業務課長)

水島爾保布《谷崎潤一郎著「人魚の嘆き」挿画》1919年
弥生美術館

大人気!! 体験型展示

スタジオジブリ・レイアウト展

2016年7月16日(土) — 10月10日(月・祝)

"ポニョ"をつかまえた記念撮影"ポニョロケーション"、自分だけの"まっくろくろすけ"を描いて壁に貼れるコーナーなど、楽しさいっぱい!! どうぞご期待ください。

鴻池朋子展

2016年12月17日(土) — 2017年2月12日(日)

暗闇にうかびあがるこの巨大な作品(fig.1)は、牛革をつなぎ合わせた幅約24mの支持体に、揺れ動く大地や生きものたちのイメージを描き出した鴻池朋子の新作です。2015年秋、神奈川県民ホールギャラリーを皮切りに、当館を含め国内数カ所を巡回する個展の核となる作品です。

2011年の東日本大震災以降、自身の心と体に生じた変化を敏感に感じ取った作家は、それまでの制作方法から離れ、人類学、民俗学、考古学の専門家との対話や、普段は人の出入りがない登山者用の避難小屋に作品を設置する『美術館ロッジプロジェクト』、また歴史には記されない個人のささやかで素晴らしい記憶を手芸で紡ぐ『物語るテーブルランナ』など、従来のフィールドの外に出る活動を行ってきました。そして、ものをつくる一人の人間として、「つくる」ことの意味と新たな手応えを模索してきました。6年ぶりの大規模な個展となる本展は、自然と人間との間に出現した芸術の根源的な力を問い直すものです。

本展に出品されるのは、皮や素焼粘土(fig.2)、羊毛や羽毛など、作家の手が新たに探り当てた素材による新作です。鴻池作品の魅力でもある精緻さに加え、ものづくりの原初に見られるかのような野性味を感じさせるこれらの作品が、一つの空間で互いに作用し合う様を、五感で感じ取っていただきたいと思います。

今井 有(当館業務課課長代理)

fig.1 鴻池朋子《皮綴帳》2015年 ©Tomoko Konoike 撮影：中道淳(株式会社ナカサアンドパートナーズ)

fig.2 鴻池朋子《素焼粘土》2015年 ©Tomoko Konoike 撮影：宮島径

EVENT PICK UP イベントピックアップ

昨年度実施したイベントについてご報告します

生誕100周年 トーベ・ヤンソン展 ～ムーミンと生きる～

2015年2月28日(土) — 5月6日(水)

ムーミンがびじゅつかんにやってくる!

当日4回行われた写真撮影には、たくさんのお客様にご参加いただきました。「かわいい!」「だいすき!」と言われたムーミンは少し照れていましたが、たくさんのお友達と握手やハイタッチをして、とても楽しい時間となりました。

日韓近代美術家のまなざし — 「朝鮮」で描く

2015年5月16日(土) — 6月28日(日)

講演会「近代期の京城=ソウル、おんなたちの『モダン』と『伝統』」

展覧会に学術協力をいただいた沖縄県立芸術大学准教授の金惠信(チョン ヘシン)さんをお招きしました。戦前の朝鮮美術展覧会では「地方色=ローカルカラー」を出したものが入選しやすかったとのことで、実際の入選作品を例に、チマ・チョゴリを着た女性や妓生(キーセン)などの描かれ方についてお話を伺いました。

生誕100年 亀倉雄策展

2015年7月11日(土) — 8月30日(日)

講演会「亀倉雄策の東京オリンピックと大阪万博」

東京国立近代美術館工芸館主任研究員の木田拓也さんから、1964年の東京オリンピックがスポーツの祭典というだけでなく、日本人の意識を大きく変えたイベントであったこと、そしてそのような意識改革に「デザイン」が大きな役割を果たしたことなどをお話しいただきました。

三宝院開創900年記念 世界遺産 京都・醍醐寺展

2015年9月19日(土) — 11月8日(日)

法要「醍醐の祈り」

真言宗醍醐派新潟宗務所寺院により会期中5回執り行われた法要には、毎回数多くのお客様にご参加いただきました。重要文化財の快慶作《不動明王坐像》を本尊とし、曼荼羅や大壇具を配置した「祈りの場」の再現展示に、厳かな空気が流れました。

「生誕100年 亀倉雄策展」をふりかえって

亀倉雄策の代表作《ヒロシマアピールズ1983》の原画は、イラストレーターの横山明氏の手によるものです。現在は川崎市市民ミュージアムが所蔵するこの原画を、昨年の展覧会で展示した際、横山氏にお電話で制作当時のお話をうかがうことができました。

氏の記憶によれば、原画の依頼に際し亀倉は、自筆の簡単なスケッチを見せ、さらに参考イメージとして、日本画家・速水御舟[1894—1935]の代表作で、炎に群がる蛾を題材にした《炎舞》(1925年、山種美術館蔵、重要文化財)を挙げたといいます。近代日本画を代表するこの名作が亀倉のポスターと結びついたことは大変意外でした。しかし一方で、デザインのみならず、美術というものが、長い歴史の中で蓄積されてきた多様な表現を引き継ぎ、それを新たな形で世に送り出すものだということを改めて実感するとともに、亀倉の見識の深さ、柔軟な発想力に触れることができました。

もちろん、亀倉のイメージを汲み取り、的確に表現した横山氏の技量が重要な役割を果たした事も見逃せません。原画の制作過程については、ご本人が『横山明のイラストレーション』(1983年、グラフィック社)で詳しく記されていますので、ご興味のある方は是非ご一読ください。

亀倉雄策《ヒロシマアピールズ1983》1983年
ポスター イラストレーション=横山明

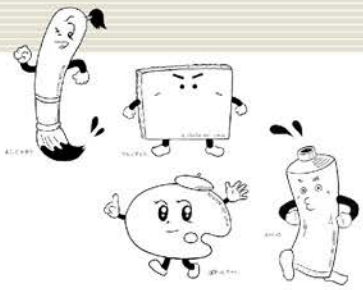
「京都・醍醐寺展」を終えて

県内展覧会最多となる国宝16点・重文22点を展示した「京都・醍醐寺展」。なかでも《五大明王像》(重文)がズラリと並んだ展示室は圧巻でした。また、未指定ながら大きな反響を呼んだのが、「醍醐寺文書聖教」のひとつである『諸国御末寺・修験官職継目控』です。厚さ13センチ、1000ページを超えるこの帳簿には、江戸～明治初期に全国に存在した醍醐寺の末寺が記録され、うち越後は20ページ分、佐渡は8ページ分にもなります。この史料によって新潟県の近世史研究が進展する可能性があり、その存在を広く紹介できたことも、本展の大きな成果といえるでしょう。

重要文化財《五大明王像》平安時代(10世紀)
醍醐寺蔵

NIIGATAアートリンク

新潟のアートシーンをもっと面白く、もっと元気にすることを目的に2012年度からスタートした「NIIGATAアートリンク」。新潟県立近代美術館・万代島美術館、新潟市美術館、新潟市新津美術館の4館でスタンプラリーを開催し、4館の展覧会を見てスタンプを集めた方に景品をお渡しします。2016年度も多彩な展覧会をご用意して皆様のお越しをお待ちしています!



サポートメンバーを募集しています

万代島美術館では、皆さんに美術館により親しんでいただくために、サポートメンバー(ボランティア)を募集しています。内容は、美術館および展覧会のイベントへの協力と、当館の活動や展覧会準備の補助です。活動をご希望の方は、お電話にてお問い合わせ下さい。
TEL：025-290-6655

新潟県立近代美術館(長岡市)の企画展

【開館時間】午前9時～午後5時(観覧券販売は午後4時30分まで) 【休館日】月曜(ただし月曜が祝日の場合は開館し、翌日休館)、年末年始、展示替期間
【お問い合わせ先】〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14 TEL:0258-28-4111(代表) URL：http://kinbi.pref.niigata.lg.jp/

ジブリの大博覧会
2016年3月5日(土) — 5月15日(日)

モネ展 マルモッタン・モネ美術館所蔵
2016年6月4日(土) — 8月21日(日)

ボストン美術館 ヴェネツィア展 魅惑の都市の500年
2016年9月10日(土) — 11月27日(日)

良寛と巻菱湖 越後が生んだ幕末の二人の書人
2016年12月13日(火) — 2017年1月15日(日)

新潟県立万代島美術館
The Niigata **Bandaijima** Art Museum

〒950-0078
新潟市中央区万代島5-1(朱鷺メッセ内 万代島ビル5階)

TEL: 025-290-6655 FAX: 025-249-7577
URL: http://banbi.pref.niigata.lg.jp/

How To Access

新潟県立万代島美術館は、新潟市を貫く信濃川の河口にある複合施設「朱鷺メッセ」の中、万代島ビル(ホテル日航新潟と同じ建物です)の5階にあります。

新潟駅から
- バス……約15分
  (万代口バス乗場より「佐渡汽船」行(3番線)あるいは「新潟市観光循環バス」(2番線)に乗車。「朱鷺メッセ」下車)
- タクシー……約8分
- 徒歩……約25分

新潟空港から
- タクシー……約20分

自動車(有料駐車場有り)
- 高速道路、北陸道(新潟西I.C.)・磐越道(新潟中央I.C.)・日東道(新潟亀田I.C.)から一般道へ。新潟バイパス、亀田バイパスを紫竹山I.C.で下り、栗ノ木バイパスを新潟西港方面へ。

信濃川ウォーターシャトル(水上バス)
- 新潟ふるさと村から……約50分
- 新潟市歴史博物館から……約5分

開館時間 午前10時～午後6時
(観覧券販売は午後5時30分まで)

休館日 月曜日(展覧会によって月曜開館あり)、展示替期間、年末年始(12/28～1/3)
※展覧会によって異なりますので、展覧会ごとにご確認ください。

観覧料免除 新潟県内の高等学校・特別支援学校が、教育活動として美術館に団体引率をする場合、所定の用紙で事前に(見学の一週間前)申請をすることにより、観覧料が免除されます。美術の授業、社会科見学、遠足などさまざまな形でご利用いただけます。